



## 日暮れて道遠し

鈴木 進

この度、協力研究員としてキリスト教研究所に加えていただきました。よろしくお願い申し上げます。

私は数年前に短大を定年退職した老書生です。現在は非常勤講師として横浜校舎の授業を担当しているものの、研究や学会からは徐々に縁遠くなりつつありました。そのような私が7月のブラウン館での一泊研究会に参加し、先生方の研究発表に刺激されて、もう一度勉強する意欲を掻き立てられました。

『あんげろす』の原稿依頼をうけて、過日研究所に提出した履歴書の下書きを見ながら、己の過ぎ来し方を振り返りつつ綴った拙文をもって自己紹介に代えさせていただきます。

私は以前読んだ大江健三郎のひとつの文章を思い出しております。「自分(大江)は結局この一人の作家を生涯読み続けることになるのだろう」と、そのような趣旨でした。彼にとってのその作家とはポール・ヴァレリーだったのでしょうか。私も40年ほど前、明治学院大学、ヘボン館の何階かにあった英文学研究科の教室で、大江と似た経験をいたしました。ヴァン・ワイク先生の「アメリカ文学特講」の講義においてでした。先生はF.O.Matthiessenの American Renaissance をテキストにアメリカ・ルネッサンス作家たちについて教えて下さいました。そのなかで私は、私にとって「一人の作家」Nathaniel Hawthorne との出会いをいたしました。秋学

期にはモリソン、マードック、ペリー・ミラーなどニューイングランド・ピューリタニズム研究に私の目を開いて下さいました。先生の話される英語もテキストも十分咀嚼できぬまま、学期末にホーソーンの“*Young Goodman Brown*”を取りあげて「人間の心のなかの罪」や「森」の象徴などを強調したペーパーを提出いたしました。このことがその後の私の勉強の方向を定めたように思います。

北陸、金沢にあるキリスト教主義短大に勤務するようになり、ホーソーンの晦渋な文章に苦しみながら、しかしその美しさ、深さに魅せられて、短編をひとつ、またひとつと論文にまとめては『紀要』に載せてもらいました。金沢において、私のもうひとつの勉強のテーマ「ニューイングランド・ピューリタニズムの日本における受容——明治前期アメリカ人宣教師の働き」を調べ始めました。金沢では1879年にプロテスタント最初の宣教師トマス・C・ウィンが伝道を開始し、教会建設、教育福祉事業、さらにアメリカ文化を伝えました。これについて私は後に、高谷道男先生の助けを得て、ウインの伝道報告を中心とした THE LETTERS OF THOMAS CLAY WINN を上梓いたしました。

幸いに短大就職5年目にアメリカに勉強に行く機会が与えられました。マサチューセッツ州ノーザンプトンにある大学が私を客員研究員として受け入れてくれたのです。大学院のアメリカ研究科のゼミに出席するほか、ホーソン文学の背景を自分の目で見ることも、また初期植民地史の資料を集める7ヶ月でした。ニューイングランドの紅葉や厳しい冬の寒さなど、ホーソン文学の気候や風土もちょっとだけ味わいました。

1991年に藤沢市に新設の短大に移り、大学の草創に関わりました。その短大も定年を迎え、これで念願のホーソンが自由に(時間的に)読めると、ホーソン全集を机の上に並べました。

しかしその楽しみは一時おあずけにすることにいたしました。今年のうちには纏めたいテーマと出合ったからです。それは「日本におけるピューリタニズム受容」の

ひとつとしてのヘボン研究です。今年2007年はヘボンの『和英語林集成』初版出版140年の節目の年に当たるので、これまでに考えたことを書いておきたいと思ったのです。この夏休みはほとんどそのために使いました。秋にキリスト教研究所において発表することになっておりますので、その席においてお目にかかりたいと思っております。

(すずき すすむ 協力研究員・本学非常勤講師)